ひろば大代

NO.409

大代まちづくりセンター

H25.8.23

「第28回都市とふるさとを結ぶ交流会」に参加して

関西高山会副会長　山崎雄弘

開会式にて

8月14日、旧小学校体育館で開催された「ふるさと交流会」は、オープニングセレモニーでいきなり石見神楽の演舞でスタートし、久し振りに帰省して交流会に参加した私達を、一瞬の内に「ふるさと大代」の世界に呼び込んでくれました。

私は、昭和16年（太平洋戦争が始まった年）に満州（今の中国）で生まれ、終戦の直前に引き揚げてから、昭和35年に江津工業高校を卒業するまでの僅か16年しか大代には住んでいませんでしたが、石見神楽や田植囃子、盆踊り等、子供の頃の懐かしい思い出は今も忘れることはありません。

当時は冬になると、今では想像もつかない程の雪が積もり、朝、小学校にたどり着いてからも、だるまストーブのまわりに濡れた靴や手袋をおいて乾かしたことなどを今でも覚えています。

私の両親や、弟妹も昭和40年代に関西に呼び寄せましたので、既に実家も墓も大代にはありませんでしたが、それでも故郷として大代が懐かしく思われるのは、子供の頃の友達との遊びの思い出、小・中学校の同級生との交友、親戚の叔父・叔母、従兄達との久方振りの出逢い等があるからです。

田舎の過疎は大変厳しく、高齢化の一途ですが、そんな環境の中で「交流会」が今年も開催された事は、本当に関係者の方々に敬意を表する次第です。

関西で盆踊りと言えば、江州音頭や河内音頭が定番ですが、大代の唐笠を持った音頭取りでの盆踊りは、60年前にタイムスリップした気持ちになり、思わず踊りの輪に入り込んでしまいました。

近年、お盆の墓参りで帰省する人は減少し、ふるさと大代も高齢化で交流会に参加する人が少なくなっているようですが、過疎と高齢化の厳しい環境の中では仕方のない事と思います。

私は、久し振りに大代に帰省して、

親戚や友人達と出逢い、「ふるさと交流会」にも出席して石見神楽や盆踊りを満喫しましたが、例え実家や墓はなくても、ふるさと大代は何時までも心の中に宿っているものだと改めて感じました。

都市で暮らして居られる大代出身者や二世の方々が、来年の「ふるさと交流会」に一人でも多く参加して下さることを祈って止みません。

そして今回、美味しいおにぎりを作って頂いたり、模擬店をお世話頂いたりした婦人会をはじめとする大代町の皆様方に心からお礼を申し上げます。

お盆について

西臨寺住職　荒本由未

一年の内で最も大代町の人口が増えるお盆を今年も無事に迎えることができました。新盆を迎えたご家族もありました。

お盆の行事が行われた一番古い記録は推古天皇頃（六〇六年）の「盂蘭盆会（うらぼんえ）」であるとされています。

この「盂蘭盆会」の基になっているのが『仏説盂蘭盆経』というお経です。現在の日本で行われているお盆の行事はこのお経が根本になっています。

そのお経に登場するのはお釈迦さまの十大弟子のお一人である目連尊者です。目連尊者は神通力という特殊な力を持っていました。その神通力によって亡き母がどの世界に生まれているのかを見たところ、なんと亡き母は餓鬼道の世界に堕ち苦しんでいたのでした。

どうすれば母を救うことができるのか、目連尊者はお釈迦さまに教示を請いました。

するとお釈迦さまは夏安吾（げあんご）の終了する七月十五日に僧達に精一杯、供養することを勧められました。

その通りにさまざまたくさんの品を供養したところ、「三宝功徳（さんぼうくどく）の力・十方衆僧の威神の力」によって母は救われていったのでした。

「三宝」とは仏・法・僧のことで、ほとけさま（仏）と仏さまの教え（法）と仏さまの教えを実践している人びと（僧）をいいます。

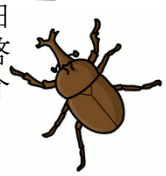
そして目連尊者が亡き母を思ったように、亡き先祖を偲び、お墓参りをするようになったのでした。その際に「施餓鬼」という仏事もなされました。

また盆踊りは目連尊者が、餓鬼道の苦しみから母が救われた事を喜び、うれしさのあまり踊ったことが由来とされています。

お盆はもともと旧暦の七月の行事でしたが、当地では月遅れの新暦八月の十三日から十六日をその期間とします。一般的に迎え盆・送り盆には火を焚いて、先祖を案内し、見送ります。宗派によってはいたしません。

「故郷（ふるさと）大代」

下飯谷　飯田啓介



昨年三月、山口県の大学を卒業してこの我が故郷大代に帰って来ました。大学生活四年間というわずかな期間でしたが、この大代から出て改めて気付く故郷の良さがありました。

大江高山が堂々とそびえ立つ見慣れた風景、帰った時に温かく迎えてくれ

る見慣れた顔、小さい頃から聞き慣れた囃子の音。何より、帰る場所があるということそのものが安心出来ました。「心安らぐ場所」そして「帰る場所」それが故郷です。大代はそんな故郷として守り続けていかなければならないと思います。守るという表現は大袈裟に思われるかもしれませんが、限界集落となっている現在、守っていかなければ今後存続していくことは難しいです。

僕が目指すのは「大代の再興」です。良いものを引き継ぎ、良いものを伝えていく。それが田舎の小さな町が存続し続けていく方法だと思います。

引き継ぎ、伝えていくのは「人」です。だから、現在大代に住んでおられる方も、今は大代から出て行かれている方も、この大代を故郷とする全ての「人」たちで守っていかなければならないと思います。

大代にいる人は、帰る場所が寂しくないようにすることが役目です。大代から出て行った人は、年に何回かは必ず帰ってきて大代と繋がりを持ち続けることが役目です。昔に比べると無くなったものもたくさんありますが、残っている素晴らしいものもあります。その残っている素晴らしいものを大切に残していくことで今後開ける道があると思います。

そこには必ず「人」が必要だということを忘れてはいけません。僕もその一人として、大代が故郷としてあり続けるために、これから自分なりのアクションを起こしていきたいと思います。

大代町の宝物

センター長　佐藤哲朗

先日、まちセンの書庫・倉庫を整理していましたら、明治40年5月29日に東宮殿下（大正天皇皇太子時代）が鳥取・島根県視察の折り旅館として大家村尋常高等小学校(旧大代中学校、現在の大代まちづくりセンター)にお泊りになった当時の写真数点と、殿下から賜った熨斗袋(中身は空)が保管されていました。

写真の中には歓迎の飾り付けをした大家尋常高等小学校が在り、大代小学

校百年史（45頁）を見ると行啓記念絵はがきに使用された物と思われます。写真はシミや汚れがあるものの１０６年経過した割には保存状態も良く、パソコンで修正し復元しました。

又、故渡吉正氏から寄贈された視察の記録「山陰道行啓録」(明治40年９月発行)も保管されていましたが、傷みが激しく貸し出しは不能ですが、複製された物がまちセンに在り、貸し出しは可能です。

いずれも当時の歴史を知る貴重な資料ですので、この機会に町民の皆様に当時のことを知って頂きたいと思い、お知らせします。

＝俳句＝

あすなろ句会

柿田　横手いちえ

蓮の花　今朝は二輪や　紅の濃し
雨上がり　急がす如く　蝉時雨

八反田　森　信子

手花火の　一瞬輝き　落ちにけり
里住ひ　開け放ちたる　夏座敷

椿　花田時子

蚊の嫌ふ　強き香や　ゼラニウム
戦中の　思ひ出多き　南瓜飯

下市　今田文子

夏祭　天領踊りに　加わりて
夏葦に　日毎追われて田や畑

川上　岩田律枝

蜩（ひぐらし）や　哀はれを誘ふ　暮るる里
運休の　知らせ列車や　夏豪雨

椿　柿丸寿枝

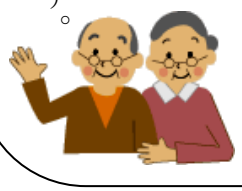
真黒く　なりて轟く　はたた神
これ以上　耐ふる術なき　酷暑かな
※はたた神　（かみなりのこと）

大代町敬老会のご案内

大代地区社会福祉協議会

大代町では９月15日（日）に旧大代小学校体育館において、午前10時30分から七十五歳以上（一五七名）の方々を対象に敬老会を開催します。可愛い園児たちの歌と踊りの披露もあります。皆さん是非お出かけください。

町民の皆様方のご協力をよろしくお願い致します。



＝お知らせ＝

◎お礼

大代高山会より

都市交流会においてご寄付を頂きました。厚くお礼申し上げます。

東京石見高山会様　関西高山会様
松本健一様　今田　潔様
山崎雄弘様　東野孝雄様
宇井好恵様　竹内賢三様
杉山咲智子様

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

９月行事予定

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

▼１日（日）婦人会支部長会
▼15日（日）大代町敬老会
▼17日（火）さくらんぼ教室
▼23日（月）連合自治会

＝編集後記＝

まだ日中は残暑が厳しいですが、耳を澄ますと蝉の声から虫の声に代わっています。今月末にも稲刈りが始まり、一年で最もうれしい収穫の季節です。今年のお米は豊作だとか。（★こ★）